

第1章（建学の精神・大学の基本理念、使命・目的、大学の個性・特色等）

I. 建学の精神・大学の基本理念、使命・目的、大学の個性・特色等

(1) 建学の精神・大学の基本理念：

昭和12（1937）年からの七十余年の歴史を有する田村学園は、建学の精神「質実清楚・明朗進取・感謝奉仕」を礎とし、一人一人の豊かな個性を伸ばし、一人一人の内在的能力を自らの力で大きく伸長させ、新しい時代に活躍できる人材の育成を目指している。特に、国際化、情報化社会の進展に即応して、世界の中で大きな役割を担う日本の将来を担う人材としての自覚に基づいた強い実行力と広い視野をもち、自らを厳しく律することのできる高い倫理観を育成することを最大の課題としてきた。

本学では上記建学の理念に則り、社会の進展に貢献する自立した人材の育成を実践している。

大学創立以来の基本理念は「国際性、学際性、実索性」の三つのキーワードで表現される。

〈国際性〉：

グローバル社会の一員として積極的な役割を果たす人材を育成する。

〈学際性〉：

行き過ぎた専門化の弊害を是正するため、学際的な研究・教育への取組みを重視する。

〈実索性〉：

大学に対する「象牙の塔」批判を克服すべく、「社会に通用する大学」を標榜する。

更に、大学の教育理念を「現代の志塾」と定め、教育・研究・社会貢献の全分野においての共通の考え方としている。

(2) 大学の使命・目的

本学の目的については、学則第1条に本学全体の目的を、学則第3条2項及び3項に経営情報学部とグローバルスタディーズ学部、また、大学院学則第1条に大学院経営情報学研究所を記述している。

〈学則第1条〉

「多摩大学は、永年に及ぶ産業教育における経験を基盤とし、国際化・情報化時代に即応して、学生に高度な外国語能力と世界に通用する教養・最新の経営知識及び的確な情報処理能力を修得せしめ、国際的ビジネスの場で活躍できる人材の育成を目指すとともに、わが国の産業社会の健全たる発展に寄与する指導的人材を育成することを目的とする。」

〈学則第3条〉

2 経営情報学部は、企業経営、情報科学に関する学術と応用を教育研究し、高度の経営情報知識と、これを支える豊かな教養とを合わせ備えた創造的、実践的な問題解決能力を有する人材を育成することを目的とする。

3 グローバルスタディーズ学部は、文明・歴史・経済・多文化交流などに関する学術と

応用を教育研究し、語学力を活用したコミュニケーション能力とグローバルな問題を解決できる能力を持ち、国際基準の知識とこれを支える教養をもとにグローバルな舞台で活躍できる人材を育成することを目的とする。さらに、社会人を対象とした大学院（修士課程、博士課程）及び複数の研究所より成る研究開発機構も、学則第1条に則り教育研究活動を行っている。

(3) 大学の個性、特色

本学は、開学以来「学際性」「実際性」「国際性」を標榜し、研究機関であるよりも教育機関であることを重視した教育・研究、時代の最先端を走る産業界で活躍した人材の教壇への多数の登用など最大の特色は一貫して実践してきた「実学教育」にある。

平成 19（2007）年度には、国際性をより重視したグローバルスタディーズ学部を設置し、さらに平成 20（2008）年には、志の失われた時代に、その重要性を強調するため本学を「現代の志塾」と位置付け教育理念とした。個人の責任でないことが理由で差別を受けるといような社会の不条理をただすことに、自らの能力と技術を最大限に発揮した職業（仕事）を通じて何らかの貢献をすること、それを本学は「志」と定義し、これらを開学 20 周年を機に、実学教育を深化させ新しい時代の実学として「今を生きる時代についての認識を深め、問題解決能力を高めること」とした。

時代と向き合うという意味を込めた「現代」、社会の不条理を克服することに貢献するという意味を込めた「志」、そういった志ある人材を少人数教育で豊かなコミュニケーションを通じて育てる意志を「塾」という言葉に込めている。志の失われた時代に、幕末の松下村塾（吉田松陰）、適々斎塾（緒方洪庵）、咸宜園（広瀬淡窓）など志の高い有為の人材を輩出した私塾の現代版を目指す。

この教育理念は、教員個々人の主宰するゼミの人材教育の志、教育プログラムを支える職員の志の明確化、そして学生への日常的な志の問いかけと涵養という大きな流れになりつつある。高校生に対する「志小論文コンテスト」の実施、志を育む教育プログラムの再構築（カリキュラム対系の大再編、履修モデルの設定、シラバスの定型化、）、そして問題解決力の高い卒業生を多摩（多摩学を通じた多摩グローカリティ研究）を中心とする「志企業」に就職させ、大中華圏を中核とするアジア・ユーラシアダイナミズムの勃興という新しい時代に参画してもらおうという戦略と全学的な方向感が明確になっている。そのカリキュラムの中で特に注力しているのは以下の項目である。

①実学に基づく問題発見力の養成

実業界で活躍した教員の経験を基に、実務現場で抱える問題を取り上げ、学生に問題発見を促す教育を通じ、問題発見力を養う。また、学部間または学部・大学院の垣根を越えて広く受講生を集め、彼らの異なる視線を通して、多様な物の見方を知ることによる新たな問題へのアプローチも経験させる。

②志を伴った問題解決力の養成

授業の中で扱う問題を、単に客観的対象として捕らえるのではなく、自ら主体的に考え、解決に向けて自ら行動するという熱意を持たせることにより、自らの志を発信し、仲間を創りリーダーシップを発揮する力を養成する。

③少人数教育によるコミュニケーション力の養成

自らの志を伝える力を養成するには、単に自己主張を貫くだけでなく、他人の意見に耳を傾け、彼らの考え方を理解した上で自分の思いを伝える必要がある。こうした意味でのコミュニケーション力・対話力は、少人数による時間をかけた議論の中から熟成されるものであり、年間を通したゼミ形式の授業で実現される。

④社会・地域へ自ら働きかける力の養成

大学の拠って立つ地盤である多摩地域を中心として、その土壌・風土にあった提案とその実行ができることを目指している。そのためには、地域で活動する人々との連携を強めるだけでなく、連携にあたって学生たちがあらかじめ地域の特性を歴史的な観点を含めて十分理解することを重視している。